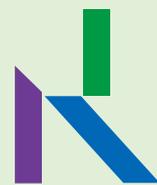


大学教育開発センター通信

2009年度
第1号
通巻第21号



CONTENTS

【特集】

指定研究プロジェクト、 自己応募研究プロジェクト、 研究報告会開催報告

センター長挨拶 2
松本和一郎 (大学教育開発センター長)

2009年度 大学教育開発センター事業計画 3

【特集】

2008年度 指定研究プロジェクト、自己応募研究
プロジェクト研究報告会開催報告 4

■「2008年度指定研究プロジェクト・自己応募研究
プロジェクト報告会に参加して」
出羽孝行 (2008年度大学教育開発センター運営委員)

■自己応募研究プロジェクトの報告
「地域共同映像制作とインタビュー体験」
松浦さと子 (2008年度自己応募研究プロジェクト代表者)

■「2008年度指定研究プロジェクト報告会に参加して」
窪田和美 (短期大学部教授)

2009年度自己応募研究プロジェクト紹介 6

2009年度新任教員就任時研修会開催 7
■プログラム 参加者の声

FD活動紹介 8
■「FD活動について」 西川清之 (経営学部教務主任)
■「社会学部の教育改善を考える」 小椋 博 (社会学部長)

フォーラム参加記 10
■「大学コンソーシアム第14回FDフォーラム」に参加して
近藤久雄 (法学部教授)
■「大学コンソーシアム京都主催 第14回FDフォーラムに参加して」
壽崎かすみ (国際文化学部准教授)
■「多くの実践を通じたFD活動の実質化に向けて」
松山幸司 (国際文化学部教務課)

新着図書紹介 12

会議構成員紹介 12



センター長挨拶

松本 和一郎 (大学教育開発センター長)

龍谷大学は親鸞聖人の教えを建学の精神としています。聖人は「阿弥陀仏は一切衆生を救う」ことを説かれました。本学の教育の根本はまさにその点にあります。本学の教育の根本方針は、縁あって龍谷大学に入学した学生諸君を一人残さず立派な人材に育て上げることです。残念ながら、われわれは凡夫であって仏ではありませんから、必ずしも一人残らず育て上げること成功しているわけではありません。「一人残らず立派な人材に育て上げるためにあらゆる努力を惜しまない」ということです。学生に学ぶ意欲がないから授業がうまくいかないのは仕方がない、と嘆く教員がいますが、嘆いていけるのではなく、学生に意欲を持たせるには何をしたらよいかを考えるのです。学力が低くて、学生が授業についてこれられない、と怒る教員がいますが、怒るのではなく、学生の学力の底上げをするには何をしたらよいかを考えるのです。考えたらすぐに名案が浮かぶわけではありません。あれを試みこれを試して、やっと、これは効果があるなどいえる方策にたどり着くのです。努力と根気が欠かせません。もちろん、今日言われる「学力低下」や「学ぶ意欲の喪失」は、大学だけの責任ではありません。初等・中等教育や家庭・社会にも改善すべきことは多々あります。大学自身が自らのなすべきことをきちんとやりとげた上で、学外の諸機関・諸団体にもそれらがなすべきであるにもかかわらず、なされていないことは改善の要望を表明していくべきです。



外的状況としましては、大学設置基準によって、大学院・学部ともにFD(個人及び組織としての教育改善)が義務化されました。また、中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」では、学位の質保証を強調しています。このことは、「最近の大学卒業生は使い物にならない。大学は本当にきちんと教育をしているのか？」という産業界の不信感の反映であります。この不信感から、「単位制の実質化」を強くうたっています。大学設置基準には「大学の授業の1単位は45時間の学習をもって標準とする」ことが定められています。しかし、大学はその定めをきちんと守っているのでしょうか？90分授業を13あるいは14回して2単位としているのが全国のほとんどの大学の現状です。学生が予習復習等の自学自習を全くしなければ、90時間必要であるにもかかわらず21時間ほどが確保されているだけです。授業機会を半期15回確保することが全国の大学の課題となっていますが、重要なことは、学生の自学自習を促す方策を講じて、半期で2単位の科目にはトータルで90時間に相当する学習を確保することです。各大学は自ら「きちんと教育をしている」ことを社会に示していかなければなりません。さらに、各大学が「学位の質を保証する」ことを求められています(DP;ディプロマ・ポリシー)。すなわち、卒業生の「あって欲しい姿」ではなく、「卒業生が全員備えている最低限の能力」を明示することです。そして、卒業生が備えているべき能力を確実に育てるカリキュラムが求められています(CP;カリキュラム・ポリシー)。そのカリキュラムに沿ってどのような入試をするか、も明示するよう求められています(AP;アドミッション・ポリシー)。これらのことは、中教審に言われるまでもなく、各大学が自らの内容を社会に表明する中で説明しておくべきことと考えます。

言われてやるのではなく、自らの責任を自覚してこれらの課題を、自発的に社会に説明していきましょう。もちろんその前提として、社会に説明できる実質を確立しておくことが不可欠です。

2009年度 大学教育開発センター事業計画

FD・教材等研究開発検討プロジェクト

■自己応募研究プロジェクト事業

教育改革を推進する一環として、学内の個人またはグループに対し、授業・教材等の研究開発を奨励し、経費面での支援を行う。研究開発成果は報告書の作成及び研究発表会により報告する。

■指定研究プロジェクト事業

大学にとって必要な教育開発研究を行い、より教育効果の高い教育を実践するための基盤づくりを進めることを目的として、大学教育開発センターが指定する教育開発に関するテーマについて研究開発を行うプロジェクトである。研究開発成果は報告書の作成及び研究発表会により報告する。

2009年度は次のテーマについての教育開発を進めていく予定である

- ①「龍谷大学におけるキャリア教育」(継続3年目) 代表：藤田 誠久(経営学部)
- ②「教員評価のあり方について」(継続2年目) 代表：加藤 正浩(経営学部)
- ③「学生の自習を促進するための方策の研究」(新規) 代表：岩本 太郎(理工学部)
- ④「FDとSDの支援と開発—教職協働モデル、プログラムの開発—」(新規) 代表：林 久夫(理工学部)
- ⑤「学習意欲喚起や動機付けへの提言」(新規) 代表：吉川 悟(文学部)

■各プロジェクト報告会の改革

教育活動評価支援プロジェクト

■学生による授業アンケートの実施

年度ごとに実施された授業アンケート結果等について、分析、総括を行い、さらなる授業改善への方策について検討する。また、授業改善の実質化を図るため、アンケートに対する学生へのフィードバックについても引き続き検討する。

■FDへの学生の参画モデルについて検討する。

交流研修・教育活動研究開発機能プロジェクト

■教育職員の新任者就任時研修会の実施

龍谷大学に初めて着任された教員を対象に、龍谷大学の教育理念をはじめ、本学での教育研究活動に必要な事項についての研修会を行う。

■教職員対象ICT支援セミナーの実施

情報メディアセンターと連携し、双方向授業の実現や、学生参画型授業の展開、充実等をはじめとした授業方法等の改善を図るために、授業でいかなる新たなICT手法の提供を目的として、いくつかのセミナーを開講する。

■FDサロンの開催

教職員間の交流の場として各種の教育活動の経験や意見交換が行える「FDサロン」を随時開催する。毎回異なる教職員に話題提供をしていただけるよう、自己応募研究や指定研究プロジェクトに参加されている方などにも話題提供していただく。

また、より多くの方々にも内容を知っていただくため、「FDサロン」での話題となった内容を『FDサロンレポート』に纏めて発行する。

■FDに関する講演会・セミナー、FDフォーラムの開催

FD活動をより深めていくために、学生との交流や、講師を招いて行うFDフォーラム等を開催する。

また、他大学や他機関で行われるセミナー等の情報収集も行き、FD活動のさらなる啓発機会を提供したいと考えている。

■公開授業と講評会

授業内容や方法等の改善に資するよう公開授業を開催していく。自分の授業と照らし合わせながら、さらに講評会で自由に意見交換を行う。

また、あらためて授業公開の目的や意義を再確認し、実施手法の見直しを進め公開授業のさらなる実質化を図る。

■大学教育開発センター通信・大学教育開発センター News の発行

大学教育開発センターでの取り組み、FD(Faculty Development)に関すること、学外での研修会やフォーラムの案内など、大学教育開発センターの活動記録として、センター通信は年3回、センター News は情報の鮮度に対応し随時発行する。

■他大学等との連携の推進

他大学との連携を推進し、積極的にFDに関する新たな情報や知識等の収集につとめる。

2008年度 指定研究プロジェクト・ 自己応募研究プロジェクト 研究報告会を開催しました。

日 時：2009年3月9日(月)12:45～16:20

場 所：深草学舎 21号館 402、403、404、408 教室

時 間	内 容 ・ 場 所		
12:45	開 会		
12:50	学長挨拶		
13:00～ 14:30	指定研究プロジェクト研究報告		
13:00～ 13:30	「龍谷大学におけるキャリア教育」 代表：藤田誠久		
13:30～ 14:00	「教員評価のあり方について」 代表：加藤正浩		
14:00～ 14:30	「国際的視野を持った事務職員のSD推進」 代表：河村能夫		
14:30～ ～14:35	挨拶 松本和一郎 大学教育開発センター長		
14:40～ 16:20	自己応募研究プロジェクト研究報告		
	分科会 A	分科会 B	分科会 C
14:40～ 16:20	域密着型授業における大学間ネットワークの構築に向けた実験事業 代表：井口富夫（経済学部）	スカイプを利用した遠隔共同教育（相互学習）プロジェクト 代表：木下徹弘（経営学部）	教育効果を高めるためのプレゼンテーションソフトの活用方法 代表：松岡憲司（経済学部）
15:15～ 15:45	経済学部基礎演習1における学生自身による教材開発～メディア制作のための調査・編集・表現の共同研究～ 代表：松浦さと子（経済学部）	ゆとり教育時代の大学英語文法補助教材の開発 代表：角岡賢一（経営学部）	教育心理学における倫理的配慮を重視した質的調査研究手法のガイドラインとなる教材作成 代表：吉川 悟（文学部）
15:50～ 16:20	問題発見・解決型都市・農村交流活動を伴う学生のサービスラーニングの試み 代表：伊達浩憲（経済学部）	龍谷大学大学院附属臨床心理相談室における臨床心理基礎実習、応用実習のあり方について 代表：友久久雄（文学部）	Moodleを使用しての教育活動の質的向上 代表：李 洙任（経営学部）
16:20	終 了		



2008 年度指定研究プロジェクト・ 自己応募研究プロジェクト報告会に参加して

出羽孝行（2008 年度大学教育開発センター運営委員）

「2008 年度 指定研究プロジェクト・自己応募研究プロジェクト報告会」の中の、私が司会を務めた「自己応募研究」の分科会 C では 3 件の報告のうち、2 件が教育活動において情報メディアを活用することに関するご報告でした。松岡憲司先生は「教育効果を高めるためのプレゼンテーションソフトの活用方法」のテーマで、他大学の事例を紹介されながら授業におけるパワーポイントの効果的な活用方法についてご報告くださいました。パワーポイントを活用すれば即教育効果が高まるものではなく、その活用の仕方が大変重要であると私自身も日々痛感しているので、教室でのスクリーンの配置の工夫や教員の教材作成のサポート体制の充実の必要性といったご提言は非常に共感させられました。

また、「Moodle を使用しての教育活動の質的向上」のテーマでご報告いただいた李洙任先生は、ご自身の教育実践を紹介されながら、学生の学習意欲を引き出すための Moodle の有効性についてご報告くださいました。学生の自主学習のためのシステムの活用など、今後私を含めて他の教員が Moodle を効果的に利用していくにあたり、大いに参考になる内容でした。同時に、こうした授業を展開できるための環境整備（ハード面、ソフト面）を大学として促進していくこ

とは急務であると感じました。

そして、吉川悟先生と秋葉昌樹先生は「教育心理学における倫理的配慮を重視した質的調査研究手法のガイドラインとなる教材作成」のテーマで、研究計画の実施状況を含めてご報告くださいました。各学術領域の倫理綱領や倫理規定を分析するのみならず、実際の調査対象者の視点から研究をされており、これまでにない斬新な教材が完成するものと期待されます。

卒業式前の忙しい時期ということもあり、全体的に参加者は決して多いとは言えませんでした。今回ご報告いただいた研究が本学の教育実践に資するようにするためにはどうすればよいか、大学構成員一同真剣に考えていかなければならないと思います。



自己応募研究プロジェクトの報告 「地域共同映像制作とインタビュー体験」

松浦さと子（2008 年度自己応募研究プロジェクト代表者）

学生たちが「ゼミ」への好奇心を抱き始める 2 セメの基礎演習 1 に、彼らの意欲に火がつくような体験をしてもらえないかと以前から試みているのが、地域社会の人々や学生へのインタビューを中心とした映像取材です。

社会現象や身近な活動から学生自身がテーマを決定し、調査を行い、語れる人を探し出し、マイクとカメラを向けるというものです。

撮影前に文献や統計に向き合うときも、現場で足を棒にするときも、それらを「良き経験」と受け止めてもらいます。

今期は、京都府消費生活安全センターから共同研究のお誘いを受け、悪質商法の若者被害阻止のために知恵を絞り、啓発映像取材を行いました。相談員インタビューなどで、センター職員のみならずから応援をいただいて発表会までこぎつけたことで、実社会に向き合ったという達成感を得た学生も少なくないと思います。

このことを研究報告会で発表させて頂きありがとうございました。機材も揃ったことから今後も実施したいのですが、もう少し長く取り組める新たな機会を見つけたいと考えています。

2008 年度指定研究プロジェクト報告会 に参加して

窪田和美（短期大学部教授）

指定研究「龍谷大学におけるキャリア教育について」では、キャリア教育と自校史教育の関係性が報告されました。

なぜ、キャリア教育で自校史を取り上げるのか、かつて立教大学で自校史教育を担当された寺崎昌男先生によると「日本における大学は、不本意入学者を多く抱えている。だから学生は不安感や焦燥感にとらわれている。しかしこの大学がどのような経緯をたどって

今あるのかを知ることは、学生にとって居場所発見にもなり、教養教育としても自校史を学ぶことは効果的」だということです。

学生は、偏差値という序列だけで大学を見てきたので、「ここにしか、、、」という自信喪失に陥っています。しかし偏差値は、大学をみるたった一つのものさしにすぎないことを知らせる必要があります。そして数あるものさしの一つに自校史があるというわけです。自校史を学ぶことは、帰属意識が醸成され学生自身のやる気と自信を引き出すことに繋がります。

入学時の目的意識が希薄でも、カリキュラムとして自校史教育が展開できれば、学生は自信をもって社会人としての第一歩を踏み出せるに違いありません。

2009 年度 自己応募研究プロジェクト紹介

自己応募研究プロジェクトとは、教育改革を推進する一環として、学内の個人又はグループに対し、教育全般、授業、教材等の研究開発を奨励し、公開に対する支援を行うことを目的として、1998年度から実施しています。

これまでに1998年度11件、1999年度11件、2000年度15件、2001年度12件、2002年度9件、2003年度10件、2004年度12件、2005年度14件、2006年度10件、2007年度6件、2008年度9件の支援を行ってきました。各々の研究成果は、毎年度発行している「FD・教材等研究開発報告書」にまとめられていますのでご覧ください。

2009年度のプロジェクトは以下の5件です。

2009年度 自己応募研究プロジェクト一覧表

代表者	共同研究者	テーマ
井口 富夫	李 复屏	地域密着型教育の実践
小黒 純	李 相哲 西村 敏雄 松浦 哲郎	「ジャーナリズム入門」のテキスト作成
角岡 賢一	——	音声CD付き英語発声教材の開発
寺島 和夫	小池 俊隆 野間 圭介	高校から大学への情報教育の効果的接合を目指して
吉川 悟	秋葉 昌樹	教育心理学における倫理的配慮を重視した 質的調査研究手法のガイドラインとなる教材作成

※以上、代表者五十音順



2009 年度新任教員就任時研修会を開催いたしました。

〈大学教育開発センター〉

プログラム：4月1日(水)

時 間	内 容	担 当	実施場所
15:10～15:30 (20分)	龍谷大学の教学理念・特色について	西垣泰幸 副学長	深草学舎 21号館 408教室
15:30～16:10 (40分)	大学教育開発センターの活動について 龍谷大学教学関係の組織について	松本和一郎 大学教育開発センター長 (教学企画部長)	
16:10～16:20 (10分)	休憩		
16:20～17:00 (40分)	龍谷大学の研究方針・政策について	河村由紀彦 研究部 課長	

配 付 資 料

①学生手帳

②教育職員新任者研修レジュメ (西垣副学長)

③教育職員新任者研修レジュメ (松本センター長)

④龍谷大学大学教育開発センターの取組概要

⑤大学教育開発センター通信 (2008年度第1号～第3号)

⑥龍谷大学第4回FDフォーラム報告集 (2008年度)

⑦研究支援ガイド (2008年度版)

⑧I Pアドレス申請書

⑨E-Mailアカウント申請書

⑩教育へのIT利用ガイドブック

⑪図書館利用ガイド

⑫来・ぶらり

⑬アンケート

参加者の声

龍谷大学の教学理念や特色について

- インターンシップなどに見られるように、充実した教学システムが用意されていると思います。
- 浄土真宗の本質を大変わかりやすく説明していただき、それが本学の教育研究大学運営の基本方針であることがよく理解できました。
- 龍谷大学の理念や向かう先を理解することができました。社会連携も含めた大学組織の概要がつかめました。
- 辞令交付式～研修会を通じて龍谷大学の建学の精神に触れることができました。すこしずつ理解を深め、教育研究に誠心します。
- 龍谷大学の規模や組織の大きさが実感できた。また、教育の特色として具体的な方針を立てて打ち出していることがわかった。
- 文科省との間のやりとりが具体的で目標についても解り易かった。

- 教育に対する真剣な姿勢に感銘を受けた。
- 要点を押さえた流れるような説明であったと思います。短時間でお見事です。欲を言えばすべてを均等な説明にするのではなく、ポイントを絞って掘り下げてよかったのではないのでしょうか。
- 学生数等の具体的な数字で、大学の全体像を見通すことができた。もう少し詳しい数字の提示や、教養科目の紹介をいただいてもよかった。



大学教育開発センターの活動について

- 龍谷大学におけるFDの現状重要性を認識できました。
- パワーポイントなどを使って説明してもらえると、より分かりやすかった。龍谷大学のFD活動に対する熱心な取組の様子はよく分かった。
- 教育の充実は今後の大学に期待される存在意義にも大きく係わることだと思います。いただいた資料をもう一度見直しながら大学が進めておられる活動についても理解を深めたいと思います。
- 教育のIT利用など大変充実しているようですので大いに期待しております。
- eラーニングなど充実しており、先生の個人経験がよく伝わった。
- 大学教育に携わることがはじめてなので、そのあり方を知ること



ことができました。特に文部科学省からの要請の中で、どのように大学独自の取り組みや、理念を打ち出していくのかという問題に触れられました。

- 大学教育、特に私学教育の抱える問題点を知ることが出来、興味深いお話でした。
- これまで勤務していた国立大学とはかなり異なり、熱心な取り組みが行われていることがわかりました。
- 文科省との関係の中で、各教員が大学の方針を踏まえて教育研究に取り組んでいることがわかった。
- FDのむずかしさがよく分かりました。前任校でも学生による授業アンケートを実施しておりましたが、これをどのようにして授業改善につなげるかに苦慮しておりました。学問の性格、受講生数、教室の構造等さまざまなファクターを入れ、カリキュラムの構成とクロスさせながら、取り組まねば形式的なものになるおそれがあり、大学教育開発センターの取り組みに期待したいと思いました。
- 教学に関する用語の内容について、もう少し詳しく教えていただきたいかった。

FD活動紹介

教育改善のために様々な取組が行われています。

■ FD活動について 西川 清之（経営学部教務主任）

前回の本学部のFD活動の紹介（「大学教育開発センター通信」Vol.16, 2007）では、木下徹弘前教務主任が、2008年度からスタートする新カリキュラムを紹介し、その中で、新カリキュラムの一つの目玉は学生の「判断する力」を育成すること、したがって本学部のFDの中心課題もこの「判断する力」の育成に据えていること、そして、そのためには、ゼミにおける議論や発表の技術、ゼミを含めて各教員が担当する科目において課レポートの書き方の技術を各教員が共有していきたい、と述べています。以下、その後の経営学部のFDへの取り組みの進展の一端について紹介します。

経営学部では、新入生は入学後すぐにフレッシュズ・ゼミ（1セメ）に所属することになります。クラス分けは名簿順に機械的に処理します。共有されたテーマは、「大学入門」です。そして、到達目標は、とにかく、①レジュメが作れること、次に、②パワーポイントなどを用いてプレゼンテーションができること、に置いています。また、各担当者のゼミ運営のために、1984年前から、共通テキスト『フレッシュズ・スタディ・ガイド』を作成していますが、この数年改訂がなされていません。そこで、その大幅改訂が必要な時期だと思っています。フレゼミに続く基礎演習（2セメ＝3セメ）は、「募集・応募・選考」方式をとっています。大方の担当者のテーマは、「社会科学入門」ですが、これ

については必ずしも共有されているわけではありません。運営についても、ゼミ担当者の個人的な創意工夫に任されている状況です。

そこで、2008年度は、6月に「フレゼミ&基礎演習担当者会議」という名称で、意見交換会をもちました。個別事例の紹介として、「キャンパスラリー」「毎回の積極的な参加を促すしくみ」「レジュメ作り・パワーポイントのスライド作り」「プレゼンフィードバックシート・自己チェックシート」「ノートのとり方」「外国語を自分で積極的に学ぶためのアドバイス」など、多彩な内容での報告がありました。また、「フレゼミでの最低到達目標」「フレゼミと基礎演習の区別あるいは棲み分け」というテーマで意見交換をもちました。

経営学部では、FDといってもまだその緒についたばかりで、本格的なFD活動はこれからと思っています。何が共有できて、どこからが共有できないか、手探り状況ですが、木下前教務主任が、Web上で、「小論文とは何か、どうやって書くか」「レポートとは何か、どうやって書くか」トレーニング用ポジションペーパーの書き方を公表していますので、本学部の5つの「最低到達目標」における「2. 自分の考えを文章で表現し、それを発表し討議する能力を身に付ける」との関連で、近々、それらを題材に、木下教授を講師としてFD研修会を開催したいと考えています。

社会学部の教育改善を考える

小椋 博（社会学部長）

○社会学部の理念は「現場主義」です。

この意味は多様に解釈できるかもしれませんが、私はとりあえず、「現場に赴く」「現場で考える」「現場の課題を共有する」「現場の人と共に課題解決に向かう」等のアプローチを用いて、学生に「現場力」を養ってもらおうことと、理解しています。

社会学部にこの「現場主義」を残されたのが誰だか、私は理解していませんが、この理念が社会学部の根幹に根付いていることを日々実感しています。その有効性を信じて疑いません。このような事情ですから、この理念が存在することに対して、本当に良かったと感謝しています。この理念の具体化を図るために、社会学部では4つの学科の全ての教員が参画する形で、学科を越えて教員が協力しながら、以下の教育プログラムや研究センターの活動を実施し、あるいはスタートさせようとしています。

○「大津エンパワねっと」

文科省の現代GP教育プログラムで採択された事業としての「大津エンパワねっと」プログラムは、大きな成果を残して今年、3年目を迎えます。4つの学科の壁を越えて取り組んだこのプログラムの基本的アイデアも、やはり「現場主義」の理念からきています。多くの先生方が本当に良くやったださり、学生も地域の方々と共に努力し、その成長ぶりは多くが認めるところです。プログラムに参加した学生は実習を通して「現場力」を身に付けたと考えます。

○「共生社会研究センター」

それから社会学部では、今年から「共生社会研究センター」をスタートさせました。社会学部では昨年学

部創設20周年を記念し、この研究センターの設置を決定しました。「共生社会研究センター」はやはり「現場主義」の理念に基づいて、主として学部の研究者が現場で活躍されている卒業生の方たちと共に、現場の課題を共有し、共に解決の方策を探るためのネットワーク作りを、大きな目的としています。

このように社会学部では「現場主義」の理念の下、学部の全ての教員が一致協力しながら教育に当たり、また卒業生等と共同研究を推進する体制が整いつつあります。このことは教育改善にとって非常に重要なことだと考えます。



フォーラム参加記

(財)大学コンソーシアム京都主催
2008年度第14回FDフォーラム

「学生が身につけるべき力とは何か」
—個性ある学士課程教育の創造—

期日：2009年2月28日(土)・3月1日(日)

会場：龍谷大学 深草学舎3号館・21号館

Time Schedule	
1日目：2月28日(土)	2日目：3月1日(日)
12:00～ 受付開始	9:30～ 受付開始
13:00～13:10 開会挨拶	10:00～12:00 分科会〈午前の部〉 第1～第4ミニ・シンポジウム 第1～第8分科会
13:10～14:50 シンポジウム(前半)	12:00～13:00 休憩
14:50～15:20 休憩	13:00～15:00 分科会〈午後の部〉 第1～第4ミニ・シンポジウム 第1～第8分科会
15:20～17:00 シンポジウム(後半)	
17:15～19:00 情報交換会	

分科会

- 第1ミニ・シンポジウム「地域連携型教育から何が学べるか」
- 第2ミニ・シンポジウム「教職協働—教員と職員との協働(Co-Work)作り—
- 第3ミニ・シンポジウム「キャリア教育の実践と今後のあり方—学士課程教育の構築を求める動きの中で—
- 第4ミニ・シンポジウム「大学教育におけるeラーニングシステムの可能性」
- 第1分科会「1単位45時間の学習の実質化の光と陰」
- 第2分科会「学生とともに進めるFD」
- 第3分科会「未来を担うプレFDの創造—大学院生大学教員準備研修のあり方と課題」
- 第4分科会「教養・文化教育としての外国語教育」
- 第5分科会「大学での学びの質を高めるために」
- 第6分科会「主体的な「学び」を目指した学習支援—「グループ学習」と「プロジェクト学習」の方法と実践—
- 第7分科会「高等教育におけるオルタナティブとしての短期大学」
- 第8分科会「初年次教育の展望と課題」

◆ [大学コンソーシアム 第14回FDフォーラム]に参加して 近藤 久雄(法学部教授)

去る2月28日と3月1日、龍谷大学を会場校として「大学コンソーシアム京都第14回FDフォーラム」が開催されました。今回のテーマは「学生が身につけるべき力とは何か—個性ある学士課程教育の創造—」でした。全国から多くの参加者を集めフォーラム自身は大盛会でしたが、それは逆に今日の日本の大学の抱える教育問題の深刻さ

を反映したものでした。

会場校を代表して若原道昭学長の挨拶、続いて運営責任者として松本和一郎大学教育開発センター長の挨拶、そして今回のテーマである「学生が身につけるべき力とは何か—個性ある学士課程教育の創造—」についてシンポジウムが行われました。シンポジストは

結城章夫山形大学長、石川憲一金沢工業大学長、田中毎実京都大学高等教育開発推進センター長、コーディネーターは木野茂立命館大学共通教育推進機構教授でした。それぞれの大学の特徴はあるものの、初年次教育や教養教育といった共通の問題についての取り組みが報告されました。私の理解では、教養教育といういわば学生の知的総合力とでもいべき点を育てる工夫の報告であったように思われます。

その後、第4分科会「教養・文化教育としての外国語教育」へ参加しましたが、主として第二外国語(本学の初修外国語)の発表者が、外国語の教育は学生の世界観の問題と深いかわりがあることを具

体的に報告していたのが印象的でした。

初日終了後の懇親会へも参加してみましたが、全国の大学から参加者があり、参加各大学は今後の大学教育の方向性について最先端の情報を得ようと担当教員を派遣しているようでした。また、参加している教員・事務職員は、それぞれの大学が抱える教育問題を解決する糸口を見つけようと、積極的に情報交換を行っていたのが印象的でした。

惜しむらくは、会場校である本学からの参加者の少なさでした。

◆ 大学コンソーシアム京都主催 第14回FDフォーラムに参加して 壽崎かすみ(国際文化学部准教授)

3月に開催されたFDフォーラムは、大学コンソーシアム京都の主催であるにもかかわらず、全国から集まった参加者で全国的な情報交換がなされました。ここでは、私が参加した高大連携に関する分科会について報告します。

この分科会では、大学コンソーシアム京都のコーディネートで京都市内の高校で実際に展開されているプログラムの他、高知大学が高知県下で実施している事例等、報告されました。京都市内の高校については、担当している大学教員、実施している高校の校長、プログラムを体験した生徒からの報告がありあした。私自身もこのプログラムの担当者として、3年間、年に数回の授業を高校で担当しています。

大学コンソーシアム京都のコーディネートしているプログラムについては、高校が何のために実施しているかは非常に具体的です。また、生徒の満足度もそれなりにあることが確認できました。しかし、このプログラムをFDと考えるならば、大学教員としてプログラムに関わることで得られたものを、大学での講義にフィードバックできるかも明らかにしていく必要があると考えますが、このことについての答えは得られませんでした。色々な要因が絡み合い回答を難し

くしていると予測できますが、そのひとつは、対象とする高校生のレベルと、大学で教えている学生のレベルが同じではないことです。高校生用に用意した授業計画をもとに大学で講義をしても、「学生が理解できない」ということを私自身は経験しています。高校側の目的がどの程度達成されているかについては、プログラムが新しいため十分な追跡調査のデータが集まっておらず分析ができていません。

高知大学の高大連携は、大学教員が高校生に関わる時間がはるかに長く、大学生を巻き込んでいるという意味でも興味深いものでした。大学生の予備軍、高校生の高校時代に入り込むことで、大学の入学生を変えるということも目的としているということでした。

そのあとの議論の中でも、他の大学から、大学に進学しないレベルの高校との連携等も含め、様々な取り組みが報告され、大学へのフィードバックについてもいくつかの提示がなされましたが、現実には日々の講義の中にどのように活かせるか、教員一人当たりの学生数等の条件が国立大学法人である高知大学とは大きく違うことを考えたとき、私立大学でどこまでかかわれるかについては疑問が残りました。

◆ 多くの実践を通じたFD活動の実質化に向けて

松山 幸司(国際文化学部教務課)

今回参加した「第14回FDフォーラム」は、総合テーマを「学生が身につける力とは何か—個性ある学士課程教育の創造—」と題して開催されました。多数開かれる分科会テーマをみるだけでも、単位の实質化に関する分科会や学生参画型FD、初年次教育やキャリア教育をテーマとした分科会など、FDの範囲が多岐にわたると理解できます。

シンポジウムでは、山形大学の全学的な組織整備をはかった教養教育の実践や、金沢工業大学のきめ細かな教育を充実させる初年次導入教育や修学ポートフォリオの実践など、先進的な大学の事例が報告されました。

全国から大学関係者が参加し、各大学の教育実践やその手法の向上にむけた議論を聞かなかで、改めて大学教育が接する現状や、多様な学生に対する教育上の工夫をはかる必要性について考える機会

となりました。

例えば教養教育を充実させるための方策として、それらを検討・実行する学内組織を整備するという手法や、個々の学生の修学状況をふまえた指導方法の工夫、これらを支援する教育システムや情報管理の整備などいくつかの方策があげられます。充実した教育をおこなうためには、これら多様な方策が連携したうえで実践することが重要であると感じました。

今回のフォーラム参加を通じて、FDに関する取り組みは、より組織的に、より多くの主体と連携して実践することが必要であるとわかりました。それぞれの主体が抱える教育上の課題は、決して異なるものではありません。活発な議論のもとに、多くの実践をおこなうことが、FD活動の実質化につながり、多様な学生に効果的な教育を実現することにつながるものと感じています。



新着図書紹介

大学教育開発センターでは、センターの資料として図書を購入しています。貸し出しも行っていますので、どうぞご利用ください。また、購入図書の希望も募っていますので、ご希望があればお知らせください。

書籍名

**学生と変える大学教育—
FDを楽しむという発想**

著者名 清水亮／橋本勝／松本美奈

出版社名 ナカニシヤ出版

ISBN 978-4779503214

大学教育開発センター 2008年度 刊行物のご紹介

- 「大学教育開発センター通信 2008年度第1号」
- 「大学教育開発センター通信 2008年度第2号」
- 「大学教育開発センター通信 2008年度第3号」
- 「FDサロンレポート）08-01号」
- 「調査報告書 2008年度 学生による授業アンケート」
- 「2008年度 FD・教材等研究開発報告書 第11号」
- 「2008年度 龍谷大学第4回FDフォーラム報告書」



※ご希望の方は、必要部数を教学企画部（内線 1050）までご連絡ください。

2009年度 大学教育開発センター会議構成委員

- 松本和一郎（大学教育開発センター長・教学企画部長）
- 安藤 徹（文学部教務主任）
- 佐々木淳（経済学部教務主任）
- 西川清之（経営学部教務主任）
- 橋口 豊（法学部教務主任）
- 藤原 学（理工学部教務主任）
- 津島昌弘（社会学部教務主任）
- 松村省一（国際文化学部教務主任）
- 阪口春彦（短期大学部教務主任）
- 小瀬 一（教学部長）
- 野間圭介（入試部長）
- 藤田誠久（キャリア開発部長）
- 伊勢戸康（教学企画部次長）

2009年度 大学教育開発センター運営委員会構成委員

- 松本和一郎（大学教育開発センター長）
- 伊勢戸康（教学企画部次長）
- 藤本 忠（文学部講師）
- ドールトン・フランクE（経済学部准教授）
- 加藤正浩（経営学部教授）
- 神吉正三（法学部教授）
- 中沖隆彦（理工学部教授）
- 村澤真保呂（社会学部准教授）
- キグリチュ イシュトヴァーン（国際文化学部教授）
- 中根 真（短期大学部准教授）
- 荒木利雄（教学企画部課長）

RUCED(ルーセッド)とは…

「龍谷大学大学教育開発センター」の英文表記である「Ryukoku University Center of Educational Development」の頭文字をとったものです。今後、FDに係る海外の大学等との交流や研究等が多くなってくることが予測されることから、昨年度より英文表記及び英文略称を設定いたしました。

